

宮内省御用
写真師 丸木利陽

光 山 香 至

竹内惣太郎(幼名)は越前国福井松平藩城下(旧)尾上中町一〇一番地、竹内宗十郎を父、母との長男として嘉永七年(一八五四)四月十四日に生を受く。父惣十郎は近くの西別院の奉納勘定係として永年勤め、惣太郎は寒い日など母が焼いてくれた湯気の出るような薩摩芋を冷たくならぬよう懐に入れて持参し父を喜ばせること度々でいつも町内の人から親孝行者と惣太郎さんは幸せな人だ、とりさんもどんなに楽しみだろうと、きつとあの子は大きくなったらえらい人になるだろうと羨望された。

その度に父はにこにこしながら冷たくなった息子の手を固く握り、火鉢の火に暖められた派に成長してくれることを祈った。

後年、日本写真歴史上にその功績を飾った利陽の少年時代を物語る一コマである。

松平藩士 丸木利平の養子となる

福井市松平藩士族丸木利平(清川町三五番地)から惣太郎を是非養子に欲しいと再三再四の懇請に両親も断り切れず承諾し丸木こまと結婚、丸木家の人となった。丸木利平は藩の弓師(米村清治恩師の文)、惣太郎もこまも何かしら将来に希望が持てず両親や妻に意志を伝え家中も快く承諾、こまも夫の将来に光明の輝く日の早やかれと祈り単身上京した。

明治八年(一八七五)見るものすべてが福井の田舎町と違い珍しいことばかり廿二才の彼も一時は途方にくれたが「エーエーこんなことで福井県人はへこたれんぞ」と持ち前のど根性を起し上野駅からトボトボと歩いて夕方近くになり宿屋へ泊ることにした。女中から京橋中之橋小路と聞き安心と疲れとですぐ床についたものの福井の両親や妻こまのこと、汽車の思い出と、まどろむ夢は走馬灯のように流れ寝返りを打つうち厭をかい寝てしまった。

翌朝早く起きて窓から前通りを眺め「さて之からどうするか?」と思案するうち別に大

きいとも思えない写真館だのに人の多いのに注目し「仲々良い商売だな」と毎日毎日出入りする老若男女子供の何人と書き止めておる内「ようし」と一大決意して、一週間程外出せず外ばかり見ている客に宿の番頭が不審に思いそれとなく主人に告げた。

七日目の晩、「これが一週間分の宿代ですが」と、恐る恐る主人はペコンと頭を下げた。

「ああそうか。よしよし払うぞ」と懐から代金を支払ったものの財布の中には残り少なくなっていた。

「まだまだお泊りですか」と主人はもう出て行って欲しいというような顔つきで云った。

「おい/心配するな。俺はな越前国松平城下町の丸木惣太郎というんだ、金ならまだここに一杯持っているんだからな」とからからと笑い「宿帳にも書いた通りだ、何も心配せず安心せよ」と、又からからと豪傑笑いをしてみせた。

「へいへい、あの松平様の御城下の方で、あの徳川の春獄の御殿様の」と、福井の話聞いて安心したようで今までの顔とは違い、にこにこ両手で膝をこすった。

「こりや少し啖呵を切りすぎたかな」と惣太郎自身も悪いとは知りつつ咄嗟の頓知に我々が苦笑した。

後年、利陽は門下生に「男子何事をやるにも正しく根性を出すもんだ」とナポレオンの言葉を言い聞かせて教育した。

惣太郎が東京に於て写真を習いたいと決意した時のエピソードである。

惣太郎は一大決意をして写真館へ入門を申し込もうと宿を出て夕方近く館の玄関に立ち「頼もつ」と大声で呼ぶと門人が出て来て「お写しの方でしょうか」「いや写しに来たのではない、写真を習いに来たんだ先生に伝えてくれ」門人はジロジロとうさんくさそうに見下し「先生は誰にもお会いしませんし、大変年長の田舎者のようですから辛棒出来ませうまい、どこか他所へ行かれたらいいでしょう」「なに！田舎者の年長で辛棒出来ぬと、そんなこと何で判る、それはお前の考えだ、はるばる遠く福井から先生の名声をお聞きし上京した者ですと早う云うて来い、陽が暮れてしまふぞ」と大声で怒鳴った。

仕方なく門人は家へ入り夜になって玄関の

戸も閉められたが「なにくそ、ここが福井県の間がどんなものかの根性を見ておれ」と横になった。空腹と疲れて何時の間にかぐつすりごろ寝した。北陸の寒さに慣れているが東京の冬空は独特の空つ風でやり切れない寒さには思はず身ぶるいした。

東京の冬は雪はなくウトウトとまどろむ間もなくほのぼのと夜明けとなり正座している。「まだ居るんですか、御来客のお邪魔になりますから退いて下さい」と正座する彼にさも驚いた様子で家へ入り先生に伝えに行った。仕方なく来客に気づかれぬように横へ行つて昼は隠れ、夜になると又玄関正面で正座。夜になると又、玄関正面に正座した。

しかしその日も何の返事もなかった。「よし！そんな気ならこつちも根気競べでゆくぞ」と空腹でゴロゴロ腹は音をたてた。

翌日も、その次の日も相手にされず「越前の人間はこんなことでヘコタレンのぢや」と。三日三晩空腹をこらえて頑張り空腹で独特のギョロ眼は血走りながら正座した。

四日目の朝、先生が会うから入れ」と睨むように云った。「とうとう勝ったぞ、江戸っ子

も根気負けしたんか」と心中笑い門人の案内で写真館の一室に通された。

床の間の正面に大きな座布団が一枚敷かれてあった。しばらくして人相いやしからぬ風貌のある館主の尊容に惣太郎は吃驚した。

「君か、三日三晩正座して入門を頼んだ福井県人は」「ハイ、先生の御尊名をお慕いしました」と思はず口に出してしまった。

「聞けば年長で妻もあるとか、君！辛棒出来ますかね。当館は仲々厳格な修業をさせることを知っておるのかね、二十二才でも当館では書生同様、玄関番からやってもらうよ、その辛棒が出来ないのなら今の内に福井へ帰りたまえ、それが君の為になるよ」「ハイ！私も福井県の間です。男子志を立てて郷閥を出づ功成らずんば帰らずです。辛棒します、入門をお許し下さい」

「今日まで始めは皆そう云って入門するが辛棒出来ぬ者が多い、何事にも打ち勝つ不動の精神を忘れず技術を磨くことだ、辛棒せよ。空腹だろうから茶漬だけでも食べさせてやれ」と門人に云い館主は席を離れた。

欄間には「喜気伝神」と毛筆で達筆に書い

た額が掲げてあった。

恩師の今の言葉を信じ写真という已に与えられた仕事を終生天職と思い忘れずに文明開花に貢献すべく惣太郎は決意した。

傍の火鉢にかけてある鉄瓶の湯気が、さも彼の前途を祝福するかのように拍手する音の如くチンチンと音をたてていた。

師によるスパルタ式修業五年を終り明治十三年（一八八〇）東京市麴町新シ橋相馬邸内に写真館を独立開業、妻こまを呼びよせ共に写真業に励み、同廿二年（一八八九）相馬邸前に国会議事堂が建築されることとなり万止むを得ず移転することに決心し、芝新シ橋外（角）に煉瓦造りの二階建の堂々たる写真館を新築、延べ九九〇米（三〇〇坪）、建築費十五万円を投じたという。世人一般は勿論、東京中の写真館のドギモを抜いたという。

自営中、常に門人に対して三日三晩昔の正座の話聞かせるとともに人間何事も一度自分で決意したことをよく守り抜く精神、又写客を大切にして真面目に仕事をして信用を得ることを口八釜しく教育した。

又、多くの門下生を養成、海外へ写真の研

改第 五九八 號

電話新橋 四百六拾壹番

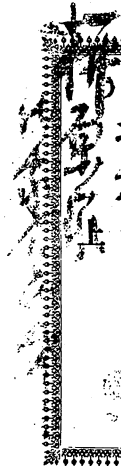
一金 三百圓 御寫眞 組

右之通正ニ 候也

但シ雨天順延ハ通問目ニ調製之事
御寫眞ハ此證書ト引替之事
種版ハ永世保存致盛候ニ付復宮御
入用ノ節ハ番號御認ノ上御注文被
成下度併御探影ノ年月日御姓名御
記載ア、レバ番號ヲ要セズ候

東京新シ橋角 寫眞師 郭送科 候

明治三十年 丸木利陽



究に門人を行かせたこと。上野美術学校内に写真科を創設し多数の写真師を養成した。永年宮内省御用写真師として明治・大正天皇の御真影を御撮影御製作申し上げると共に各皇族海外の人々を撮影した。

勿論妻こまの内助の功あって丸木利陽師の名声は全国に且又海外にも及んだという。

こうして教育した利陽の恩師は日本写真師東の元祖、下岡蓮杖の高弟の北庭築波、その高弟の二見朝隈、弟の朝陽である。

所謂、この師ありてこの門下生ありと云うべきか。

また岡倉天心に写真科創設その抱負を語り今しばし待てとの事。天心没後二年創設す。

本邦写真業ニ於ケル

丸木利陽ノ経歴

微生ノ本邦写真界ニ孤々ノ声ヲ揚ケシハ文物未ダ今日ノ如ク燦然タラズ泰西幾多ノ文明的利益ヲ移シテ以テ我有トナスニハ幾多ノ不便ト困難ニ打チ勝タザルベカリシ実ニ明治十三年ニアリ。

当時居テ現衆議院所在地トシ業ヲ開キシガ幸ニ世ノ同情ヲ博シ漸次其ノ基礎ヲ固ムルニ至リ業務ハ日々盛大ニ赴キ斯業ニ於ケル幾多ノ改良ト進歩ヲ促スニ着々鋭意スル所アリシカバ其技術ノ凡ナラザル所ヲ認メラレテカ明治廿年始メテ陛下御真影ノ御用ヲ仰セ付ケラレ當時思召ヲ以テ特ニ金壹百圓ヲ下賜セララル尋テ翌明治廿一年業務ノ繁栄ト共に従来ノ

營業所狹隘ヲ告グルニ至リ兼テ設計中ノ現營業所竣工セシカバ之ニ移リ大ニ業務ノ發展ヲ計リ益々世ノ多大ナル同情ト愛顧ヲ專ラニスルニ至レリ。

翌明治廿二年六月命ヲ奉ジ、皇后陛下ヲ御撮影シ奉ルニ至リ茲ニ於テ始メテ両陛下ノ御用ヲ一身ニ蒙ルノ幸榮ヲ辱フスルニ至リ爾來引續キ以テ今日ニ至レリ、當時又思召ヲ以テ特ニ御手許金若干圓ヲ下賜セララル今日一般ニ各學校其他ニ御下賜ノ兩陛下御真影ハ悉ク微生ノ復写シ奉リシモノニ係ル

抑モ斯業ハ今日ニ至リテハ稍々其ノ面目ヲ一新シタルモノアリト雖も過去ニ於ケル技術ハ諸多ノ改良研究改善ヲ図リ以テ自己獨特ノ技能ヲ發揮セント専ラ心ヲ茲ニ傾ケシカバ其効ヤ空シカラズ從來開催セラレシ内國博覽會共進會其他斯業ニ於ケル展覽會等ニ於テ金銀等ノ賞牌ヲ得シ事前後數十回ノ多キニ及ベリ又斯業ノ進歩發達ヲ促ワント志シ其ノ經營ニ係ル諸種ノ公益團體等ニハ金品ヲ寄附シテ之ガ獎勵ヲ図リシ事其ノ度ナリ近クハ日本写真會へ金五百圓也寄附セシガ如キ以テ微生ノ斯業ニ尽セル一般ヲ窺フニ足ラン。

光山 宮内省御用写真師丸木利陽

然レドモ眼ヲ徒ニ内地ニノミ注ギ泰西ノ進文明ノ學フベキアルヲ顧ミザルハ斯業ノ為ニ執ラザルモノナリ故ヲ以テ進ンデ欧米先進國ノ進歩發達セル技術ノ温其ヲ極メ移シテ以テ

本邦写真界ヲ進歩發達セシメント幾多、困難ト苦營ノ下ニ容易ナラザル私費ヲ投ジテ夥多ノ門下生ヲ是、欧米各國ニ留學セシメテ深ク研究スル所アラシメタリ是等海外ニ派遣サレシ門下生ニシテ能ク其ノ目的ヲ達シ歸朝ノ上夫々一家ヲナセシ顯著ナルモノヲ挙クレバ左ノ如シ、

山本誠陽 前川謙吉 平野守信 山本章雄
吉田虎之助
其ノ斯業ノ今日アルニ至リシハ實ニ海外ノ新智識ト技能ヲ取得セシ之等諸氏ノ活動ト人格ニ待ツモノノ多キヤ敢テ吾人ノ喋々スルヲ待タザルヤ明カナル所ナリ若シ夫レカカル發展進取主義ニヨルニアラズンバ或ハ本邦写真界ノ今日アル能ハザリシヲ恐ル之レ否ノ聊カ世ノ注視ヲ希フ所ノアラザルヲ得ズ、
夫レ此クノ如ク上ハ 兩陛下御用ヲ蒙リ下ハ世ノ多大ナル愛顧ヲ專ラニシ内ハ技術上幾多ノ發展策ヲ講ズルモノアリシカバ 皇太子

殿下同妃殿下各皇族方々ノ御用ヲ蒙ル事ノ數ヲ知ラザルハ敢テ之ヲ述ブル迄モナク進ンデハ英國コンノット殿下 暹羅皇太子(現皇帝)及元韓國皇太子殿下清國各皇族等ヲ始メ其他諸外國ノ皇族貴賓等ノ蒙リシ事ト一々之ヲ枚挙スルニ遑アラズ

本邦内地ノミナラズ國際ノ頻繁ナルモノアルニ至リ諸外國人ノ來リテ撮影スルモノ漸次其ノ多キヲ加ヘ今ヤ斯新ノ英米獨佛暎露西伊清等ニ輸出スルノ多キ恐ラク本邦ニ於テ拙品ノ右ニ出ツルモノナシト云フモ過言ニアラザルベク常ニ是等海外諸國ヨリ少ナカラザル需要ヲ得ツアルハ之ヲ証スルニ足ラン

然リ而シテ抑モ開業當時ヨリ許多ノ青年來リテ微生ノ門ニ入ルモノ數ヲ知ラズ幾多ノ螢雪ノ巧ヲ積ミ其ノ業ヲ卒ヘ夫々一家ヲナシ盛ニ營業シ以テ斯界ニ盡シツアルモノ全國ヲ通シテ數十人ノ多キニ達シ尚進ンデ海外ニ於テ發展シツ、アルモ鮮カラザル盛況ニ達セリ今試ニ之レヲ挙クレバ左ノ如シ。

一、東京市ノ部
望月東涯 中黒 実 鈴木栄一 山本誠陽
平野守信 山本章雄 成田常吉 高岡 卓

若越郷土研究 二九卷四号

木本幹雄 前島英男 林 豊吉 伊東末太郎 金子敏夫

二、地方ノ部

廣島市 内野弥八郎 仙台市 本間 静
福岡市 高椋公夫 横浜市 前川謙三
宮崎市 真柄 清 新潟市 和田文四郎
若松市 飯岡耕太郎 金沢市 小松幸陽
山口県 岩崎重太郎 高知市 有光伴篤
埼玉県 吉田東人 北海道 村山 弘
大阪市 九鬼亀之助 京城 岩田 鼎
平壤 天谷熊太郎

三、外国ノ部

米国 益子幹徳 米国 吉田虎之助
比律帝 露 川端兵部 ハルビン 米村清治
群島 其他微生ノ門ヲ卒ヘ近ク開業セントスルモノ十数人アリ以テ微生ノ本邦写真界ニ如何ニ貢献セシカノ一般ヲ示スニ足リシベシ

明治四十三年十二月

丸 木 利 陽 識

原文抜粹

故 伊東末太郎 歳 福井市出身

〃 米村 清治

〃